
ラブカクテルス その9 1

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その91

【Nコード】

N5780F

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は分からぬうちに酔いが回るカクテルです。気をつけてご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は鬼合戦でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私にも、とうとう赤札が送られて来た。

それは徴収令状。

ある日、村に変な噂が流れた。

ラジオで聴いたが、鬼達がこの国を狙って攻めて来るらしいなんて話をやってたという信じられないその噂は、初め天狗のイタズラだとか言われてカラカって笑いのタネだったが、しばらくすると笑えない雰囲気となってきた。

その雰囲気を持ってきたのは物騒な感じの軍隊だった。

彼らは村中から人を集めると、その一番偉そうな髭面の男が、これまた偉そうに話しを始めた。

それによると、この村にはもうすぐすると、凄い数の鬼が攻めてくる。

それらから村人を守るために軍隊はここにやってきた。
だから心配はしなくていい。

ざわついた村人達はそれを聞いて歓声を挙げたが、私にはなんだか急すぎる展開の早さに戸惑いがあるのも手伝って、その歓声には混じれないでいた。

次の日から村のあちこちには例の物騒な兵隊がワガモノ顔で現れ、村の男達を集めては戦いのための準備だと狩りだし、豪を造らせたり、石垣を積ませたり、はたまた家にあるあらゆる金属を集めさせては、何やら町へ行く車に積み込ませたりと、訳が分からぬうちに私達をその戦いの渦へと巻き込み始めた。

私は元々農家をやっていたので肉体労働じみたことをやらされてもそれほどこたえなかったが、普段商いなどを仕事にしていた村人は、体のあちこちを押さえながら、軍人などに怒鳴られて必死な姿だった。

しかし軍隊はそんな村人の様子を気にも留めずに事を押し進め、田畑までもが手を加えられて、気がつくとも村は一つの要塞と化していた。

そんな頃になると村人達はクタクタになり、荒らされた田畑を心配するのがやっとだったが、ホツとする暇もなく今度は、毎日村の広場で戦いの訓練を強制的にやらさせれる事となった。

そう、そこに集められた村人全員の手には、あの赤札が握られていた。

なんの心の準備も出来ていない私達に、指導する軍人は厳しく、辛くて倒れる者には水を投げつけて怒鳴り散らす有り様に村人は脅え、なぜ？と言いつけず事が出来ずに言いなりにされるがままとなった。そしてそんな割り切れない日々がしばらく続いたある日、村は騒がしくなった。

いよいよ鬼が攻めて来たのだった。

軍隊は海岸に部隊を集中させて、海からやって来る鬼達を迎え打つ作戦に出た。

海から村までの間にはかなり深い森が広がり、私達村人は、軍隊が海岸で仕留められなかった鬼が森で迷い入ってきた時に狙い打つように命令され、もしも逃げ出せば、鬼は村で女子供が取って食くぞと言われ、村人達はお互いを励まし、覚悟を決めた。

そのうち海岸の方でもの凄い音にが鳴り出し、一気に森の中の緊張が高まってた。

しかし凄い緊張が続きながら長い時間森に潜んでみてはいたものの、何も変化が起きない事に気が弛み、あちこちでコソコソと話し声でしたすと、指揮官は大声でそれを制したかと思うと、うつ伏せに倒れて動かなくなつた。

近くにいた村人の一人がその近くに行つてみると、そこから凄い悲鳴と、死んでるの叫び声が森中に響き渡り、そのせいで私達は全員クモの子を散らす様に逃げ出した。

指揮官がいなくなつて私は自由になつたが、そんなことより、ロープに捕まりぶら下がっていたそのロープが切れて、下へ下へと墮ちる様な恐怖が私を支配し、考えもなく身体が勝手に動くがまま、走ることしか出来ずにいた。

後ろを見ずにただジグザグに私は走つた。

どこからか悲鳴や叫び声がしている。

良くない光景が頭に浮かんでくるのを必死で抑えて、とりあえず走る。

そして、疲れ果てたからか私の足はもつれ、そのまま倒れ込み、気を失ってしまった。

どれくらい経つたのかわからないが、私は頭がクラクラするのを感じ

じながら目を覚ました。

しばらくは自分がどうして、そしてどこにいるのかが全くわからなかったが、なぜか足にひどい痛みがあるのに気付き、それに目をやっつて全てが思い出された。

そしてそのひどい痛みとは、銃弾に撃たれた傷だった。

自分ではなぜ急に倒れたのかがはつきりわからなかったが、そういう事が原因だったようだ。

私はそこを手で押さえて何とか立ち上がれないかと体を動かした瞬間、少し離れた場所から草のガサガサという音が響いた。

私の体は一瞬にして氷りついた。

もしや、

すぐ近くに鬼がいるのだろうか？

私はなるべく体を動かさず、そつと草を音がしないようにかき分け、恐る恐るそちらの方を覗いてみたが、これといった姿形は見当たらない。

しかし草の揺さぶられる音はまだしている、というより近づいてきているようだった。

私は息を殺してそのまま様子をうかがった。

だんだん、一步一步、その音は慎重にこちらにやってくる。

私の額から、やたら気持ちの良くない汗がヒヤリと流れる。

そして遂に音の正体が一瞬確認できた。

私は慌てて体を起こして声を挙げた。

助けてくれっ！

そこには見たことはないが、きっと違う村の応援部隊であろう兵隊が少し驚いた様子でこちらを振り向き、銃を構えた。

私は反射的に手を挙げると、彼らは少しホッとしたり銃を下ろし、私の傍まで来ると足の怪我がすぐに目に入ったらしく、体を抱え上げて肩を貸してくれた。

俺はお礼を言っつてはみたが、彼らは無愛想だった。

しかし怪我を治療してくれ、食事までご馳走になりながら、どうや

ら私達は村に向かっていているようだった。

私は戦いの事がどうなったのかを彼らに聞いてみたが、ナマリがひどいのか、その上かなり早口だったため、何回か聞き返したが結局わからずに、私はやはり村に残してきた妻と子供達が心配になった。そのせいで私は足の痛みも構う事なく、彼らの歩みを急かしたのだった。

森は静かだった。

あれだけの人がいた筈なのに、いや、人だけではない。

動物の気配や鳥達の鳴き声ですら感じ取れずに、風が樹々を揺らし、そのせいで葉達が噂でもしているような音だけが森を被っているよ
いだ。

嫌な予感がする。

もうすぐでそんな森を抜け、段々と道が道らしく開けてくると元々田畑だったところを堀や石垣にされた無惨な村の入り口が見えてきた。

しかしそこには、何かでひどく要塞となった村のあちこちを破壊した跡があり、その先ではここそこで煙が立ち登っている。
まるで戦いに敗れたようだ。

と、いうことは。

私は自分の家に走った。

鬼が、鬼がやってきてしまったんだ。

私は痛みを堪えて、足を押さえながら夢中になって走った。
すると私の家の近くで銃声があった。

私は焦った。

鬼が銃を持っている筈がない。

きっと誰かが鬼から皆を守ってくれているに違いない。

私は声を挙げる勢いでその音の方に向かうと、そこには驚く光景があった。

私は目を疑った。

というより理解に苦しんだ。

なぜなら、銃を持っていたのはやはり見たことのある軍人であったが、銃を撃っていたのは空で、何かを狙っていたのではなく、脅しに威嚇をしていたのだった。

そして威嚇されていた相手は村に残っていた女子供。

そして軍人達の手には食料や、金品などの村人の財産。

それを奪われまいとしてしがみ付いていたその女子供は銃声に脅えて体をすくめていた。

なぜだ。

なぜなんだ。

私はそんな軍人に飛び掛り、体を押さえ込んだが、興奮している本業の軍人にはさすがに敵わず、逆に投げ跳ばされた拳句に銃をつきつけられてしまった。

私はもうダメだと、目を瞑った。

銃声が鳴り響き、私は体に力を入れた。

しかしいつまで経っても痛みは私を襲ってこない。

恐る恐る力を抜き、目を開くとそこには倒れた軍人と、さっき一緒に村へと来た、私を助けてくれた兵隊が銃を持って立っていた。

そしてその銃からは煙が一筋、立ち上っていた。

私はまた頭が混乱した。

しかしそんな事を考える暇なく、あちこちから同じような軍人達が村を荒らしているのを、助けてくれた兵隊達は次々と始末し、やがては村から銃声が止まった。

後々分かった事だが、敵である鬼が鬼ではなく人間であった。

敵だといっていたのは他の国から来た別の兵隊達だったわけで、そして私達を戦いへと巻き込んだ軍隊も違う国からきた、この村があるこの島を植民地としていた欲の張っていた独裁者達で、ただこの

村がその二つの国が始めた奪い合いの戦いの舞台になり、しかも犠牲者になってしまったという訳だった。

初めに来た方の軍隊は戦局がまずくなると、そそくさと村へと下がり、勝ち目がないと分かった途端に盗賊になり、後から来た兵隊達はそれらを倒してくれはしたが、そもそも彼らがこの島国に攻めてくるなんて言い出さなければ、この村はこんな事にはならなかったに違いない。

全く迷惑で悲惨な結末だ。

私にしてみれば、どちらの国の人間も、鬼より野蛮に思えたのだった。

戦争とは愚かだが、始まってしまえば流れから逆らえない恐さがある。

それをいやというほど私達は思い知らされた。

しかし場合によっては私も鬼に化けていたかと思うと、時々頭を手で探ってしまった。
うのであった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5780f/>

ラブカクテルス その91

2011年4月13日21時59分発行